

# 1. 外来小児科学とは

## “Ambulatory” Pediatrics と “Out-patient” Pediatrics

こばやし のぼる  
小林 登

Key words: 外来, ambulatory, out-patient

小児内科誌が「外来小児科学」というテーマで増刊号を出すにあたり、編集子より「Ambulatory Pediatrics と外来小児科」というタイトルをいただいた。“Ambulatory Pediatrics”は、外来小児科と一般に訳しているの、同じことをいうことになる。しかし、一般にいう外来とは、“Out-patient Clinic (OPC)”または“Out-patient Department (OPD)”と英語、少なくともアメリカではよばれ、入院患者(In-patients)に対応する施設を有する病院という医療機関での、外来診療部門をさしている。

本特集では、「序」さらに「日本における外来小児科学の歴史」、そして「外来小児科学の現状と展望」と、それぞれわが国において Ambulatory Pediatrics という意味での外来小児科学を体系づけられたリーダーが執筆するので、それと重複しないようにしようとすると筆がしぶる。多少重なることもあり、またエッセイ風になるかと思うが、筆者が“Ambulatory Pediatrics”について考えていることを述べさせていただくことにする。気楽にお読み下されれば幸いである。

### ▶ Ambulatory Pediatrics との出会い

筆者が“Ambulatory Pediatrics”という言葉にはじめて接したのは、1971年のアメリカであった。1950年代後半をアメリカで過ごした当時、OPDという言葉はあったが、これを耳にしたことはなかった。オハイオ州コロバス市にあるオハイオ州立大学の小児病院で、Ambulatory Pediatricsの現場を実際にみたときのことである。

東大紛争の余燼がまだくすぶり、小児科学会も

荒れている時代であった。高津教授のあとを継いだ私は、東大入試中止のために余った予算の一部で、世界の医学教育の視察を命じられた。東大紛争の発火点になり、最も荒れた医学部再建のため、というのが目的であった。当時、教授会の中で最も若いメンバーのひとりであるというのが、選ばれた理由であった。看護学校長も兼務していたので、看護教育も視察する機会もあったことは、医師としての私にとってたいへん勉強になった。

この視察によって学んだことは多かったが、次の2点は、特に大きな意義があった。第1は、医学の基礎教育を Human Biology として教えることであり、第2は Ambulatory Pediatrics である。第1は、後に Human Biology とか、Human Science として、人間としてのヒトをどのように捉えるか、ある意味でその後の私にとってのライフワークのテーマになったからである。この点については、当然のことながら別紙にゆずらなければならない。

第2の Ambulatory Pediatrics という言葉は、当時 Primary Care とか Primary Pediatrics がわが国でもいわれ始めていたが、私にとってはまったく新しく、斬新なものにみえた。オハイオ州立大学小児病院での説明は、必要なときにいつでも医療を受けられるようにするのが、Ambulatory Clinic, Ambulatory Pediatric Care の目的である、ということであった。それによって、社会化のほとんどみられない、硬直化したアメリカの小児医療をやわらかくするという考えである。これが、現在の American Society of Ambulatory Pediatrics のめばえであったのであろう。

確かに、わが国のように社会化されていないアメリカ医療にあつては、社会階層によって、ある

国立小児病院(東京大学名誉教授)

〒154 東京都世田谷区太子堂 3-35-31

レベル以上の医療の恩恵が受けられないという大きな問題がある。アポイントメントをとって、ゆっくり時間をかけて、わが国よりはるかに良いぜいたくな診療を受け治療してもらえるのは、ある階層以上の人々であり、その子ども達なのである。アメリカ中央政府が、Medicare とか Medicaid などの制度を導入したのも、そんな流れの中での考えであった。上述の視察の折、ワシントンの NIH でその方面の担当者と話をする機会があったが、彼はわが国の制度をモデルにすると述べていた。今クリントン政権が、取り組もうとしている問題の原点もここにあるのではなかろうか。

## ▶▶ かいまみた米国、英国の Ambulatory Pediatric Care

Ambulatory Pediatricsをみせていただいたオハイオ州立大学小児病院では、当時、夕方4時から始まって夜の10時まで診療を行っていた。すなわち、工場で働いているような母親が、仕事を終ってから、わが子を抱いて、この Ambulatory Clinic で医療を受けるのである。私が訪問したとき、発熱した赤ちゃんを抱いた黒人の母親の姿が印象的であった。

2年ほど前機会あって、英国の小児病院を視察する機会があって、グラスゴウの小児病院の Ambulatory Clinic を訪問する機会があった。従来は紹介された特殊な疾患をもつ子ども達のみをみていた小児病院が、地域の要請というか、英国の医療制度のみなおしか、によってこれができたのである。新しい制度として、24時間3交替で、医師・看護婦が医療を求めて集まる親と子に忙しく対応していた。その中には、発熱のような地域の家庭医の対応ですむものから、交通事故のような生命に関係する重症な子ども達までみられた。特に印象的であったのは、外傷・骨折、さらには頭蓋内出血まで、緊急に医療を必要とする虐待された子ども達 (child abuse, battered child syndrome) をみる特別な診療室が用意されていたことである。その名はレインボー・クリニックという名称であった。刑事問題がからむので、その他の子ども達とは完全に別にしてあるのである。性的な虐待も少なくないという話であった。

Ambulatory Clinic が、救急医療 Emergency Clinic と異なるのは、特殊な医療技術と設備を必要とする生命に関係するしないの問題ではなく、生命に関係のない発熱とかひきつけのような訴えの子ども達までもみる点にある。しかも、いつでもという点が重要なのである。

私は、Ambulatory Pediatrics も、それを行う医師と医療施設によって異なるものと思われる。小児病院のような所で行う Ambulatory Care では、どんな疾患であっても、それが子どものもつ微症状しかない疾病、命にかかわる交通事故のような子どもの外傷、さらには在宅医療中の難病の子どものもつ突発的な病態であれ、Ambulatory Clinic に来さえすれば、必要にして最高の医療を提供することになる。また、一方では、第一線の実地医家の場合を考えると、どんな子どもがいつ医療を求めて来ても、それに必要な医療を提供し、場合によっては専門医療の施設、たとえば小児病院に紹介することができるようにするのが Ambulatory Pediatric Care ということになる。この点については、“Ambulatory” という言葉から考えてみたい。

## ▶▶ Ambulatory, Out-patient と 外来という言葉

外来という言葉は、われわれが医学を志して以来なじんできている言葉であり、医療システムである。外来患者 “out-patient” という言葉は、18世紀はじめに英語圏に現れた言葉で、病院の中で生活することなしに治療を受ける患者という意味である。これに反して入院患者 “in-patient” は少しおそく、18世紀後半に現れた言葉である。

“hospital” は、中世からあった言葉で、おそらく16世紀には、すでに現在とほぼ同じ意味に用いられていたようである。“hospital” の語源である “hospita” は友人の意味で、外来者を宿泊させるのが “hospital” なのである。ローマ時代にペストの患者を教会に泊めることから始まったようであるが、イタリアでは10世紀、12世紀にはフランスで、それぞれのキリスト教の団体が教会に “hospital” をつくり、17世紀になってようやく国とか都市が中心になって現在の病院の原型が建てられ

るようになったという。

このように医療施設としての病院が体系づけられるとともに、18世紀に入って in-patient から out-patient が分離したものと考えられる。わが国で19世紀に入って、欧米の病院制度が明治政府によってもちこまれたのである。現在、世界のどこでも、“ambulatory clinic”とよぶことは少なく、“out-patient clinic”として、外来患者の診療が独立して大きな役割を果たしているのは周知のとおりである。

これに対して、同じ外来と訳される“ambulatory”という言葉は、まったく別の流れから17世紀にはじめ英語圏に現れたものである。そもそも、「歩く」とか「歩く人」と関係した言葉であり、「住居を変える」という意味もある。この言葉から出たのが“ambulance”「アンブランス」であるが、移動可能な野戦病院、病院車という意味である。“ambulance”は、前世紀に起こったロシアと英佛などの連合軍との間のクリミア戦争で活躍した移動する野戦病院のことをさしたのが始まりである。傷ついた兵士を戦場から救い出すのに使われた車がそれであった。現在、アメリカ・ヨーロッパ、あるいはわが国でも、患者に応急手当をしながら運ぶ自動車、すなわち「救急車」が、それになっている。

したがって Ambulatory Care とは、本来のこのこ歩いて来る患者、あるいは車などで運ばれて来る患者に対する医療ということになる。その小児に対するものが、“Ambulatory Pediatrics”であり、“Ambulatory Pediatric Care”なのである。

### ▶ Ambulatory Pediatric Care と Primary Pediatric Care

“Primary Pediatric Care”と“Ambulatory Pediatric Care”とどのように違うのか、考えてみるとなかなかむづかしい。あえていうならば、“Primary Care”の方は、一次・二次・三次と高度化する医療の階層性のなかで最初のステップの医療のことを指している。私は、Primary Care の“primary”は本来一義的という意味にとるべきであると考えている。“Primary Care”とは、患者が最初に接触した医療のことで、その対応に

よって予後が左右されるものである。これを子どもにあてはめるならば、“Ambulatory Pediatric Care”も“Primary Pediatric Care”も、救命救急医療をふくめて考えれば、診療内容は同じと考えることもできよう。しかし、その裏にある理念は異なるといえる。すなわち、“Ambulatory Pediatric Care”は、子ども達が医療をいっどこで求めてきても、最善の医療を提供するという立場であり、“Primary Pediatric Care”は、第一次・第二次・第三次という階層性のなかで第一次の小児医療ということになる。

### ▶ まとめ

“Ambulatory”という言葉の意味と、短期間ではあるが、私がアメリカとイギリスでみた“Ambulatory Pediatric Care”の実状から考え、思いついたことを、ここにまとめた。1970年代の初頭にみたそれが今や、American Pediatric Society, Society for Pediatric Research, and Ambulatory Pediatric Association として位置づけられている。学会も American Pediatric Society の大きなわく組みのなかで3日間行われている。

わが国に、Society for Pediatric Research はできていないが、日本外来小児科学研究会が発足し、3回目の集会をもつことはよろこびにたえない。

しかし、外来小児科学なるものを、いかなる理念の上に体系づけるか、そのあり方が問われている。単に“Out-patient”小児科学を発展させるのか、21世紀にむけて新しい流れをつくるのか、本特集でもふれられているが、われわれ小児科医は答を出さなければならない時にある。

“Ambulatory”という言葉の意味をよく考えて、久しく耳なれていた「外来」という言葉の中に新しい理想をもち込んでいただきたい。それには、その科学的な基盤も考えるべきで、私は、それを Human Biology とか Human Science、さらには Child Ecology に求めるべきと思っている。

日本外来小児科学研究会の発展を祈り、本特集が有効に利用されるのに、私の小文が役に立てば幸いである。